

大学図書館の社会連携・地域連携活動

米澤 誠

はじめに

2007年9月、江戸東京博物館で「文豪・夏目漱石展」が開催された。この展示会は、東北大学が所蔵する夏目漱石の旧蔵書を、初めて首都圏で公開するものであった。最も著名で人気の高い近代文学者がテーマということもあり、文学系の展示会としては異例の約9万人の入場者数をえることができたという。

このように、国立大学の法人化以降は、従来の国立大学図書館では考えられなかったような、社会や地域と連携する意欲的な試みが行われている。本稿では、近年のさまざまな社会連携・地域連携活動を紹介するとともに、その活動の意義を考えてみることにしたい。なお本稿では、地域を限定せずに広く社会と連携する活動を「社会連携」、地域の視点を重視した地域限定的な活動を「地域連携」と呼ぶこととする。

近年の注目すべき試み

●地域機関と連携した資料展示会

従来は図書館を会場として展示会を行うことが多かったが、近年では学外機関と共催し、より住民がアクセスしやすい場所で実施するケースが増えている。このような試みは、大学という存在をPRする効果をもつとともに、地域機関との連携の経験を蓄積し、多方面での協力関係に展開する可能性をつくり出すという意味でも重要である。

岡山大学では、岡山市デジタルミュージアムを会場として、同大学が所蔵する池田家文庫の原資料を一般公開し、江戸時代の岡山の歴史・文化を

紹介する試みを続けている。2007年は「陸の道」と称した絵図展を企画し、江戸時代の交通や宿駅、岡山の街道、岡山藩の参勤交代に関する絵図・文書等を展示した。

長崎大学では、長崎市内の百貨店を会場として、同大学が所蔵する幕末・明治期の古写真に関する展示会を開催し、日本の写真術の普及に貢献し、長崎にゆかりのある初期写真家3名の作品を市民に紹介した。同時に、古写真に関する研究者のカンファレンスや、一般向けのシンポジウムも開催している。

広島大学では、北広島町との包括的協力協定にもとづく「水の世紀を生きる」プロジェクトの一環として、図書館内の地域交流プラザで「水と田舎と北広島町」をテーマとした企画展示を開催した。開催初日には、北広島町や同町商工会との連携で「北広島のおいしい『水』を食べるフェア」を実施している。このパネル展示は、北広島町役場や各地域文化センターなどで巡回展示することになっているという。

●展示会成果の出版による社会連携

資料展示会の成果を出版することは、その成果を社会に広く、後世に永く伝えるという意味で有益な活動である。また、一時的な頒布ではなく、ある程度の期間内はどこからでも入手可能な書籍として刊行することが重要となる。

島根大学では、貴重書展示会・講演会の成果をもとに、2006年度から2008年度にかけて、地域の資料を活用しつつ広く社会の興味をひく内容の「絵図の世界」、「教育者ラフカディオ・ハーンの世界」、「華岡流医術の世界」という「～世界」3部作を刊行している（ワン・ライン刊）。いずれ

も、図版や研究者による解説が豊富で、各分野の今後の研究の基礎的資料となる優良な書籍となっている。

冒頭に示した漱石展からは、『文豪・夏目漱石』（朝日新聞社刊）が生まれている。江戸東京博物館と東北大学との共著であり、同大学の図書館職員が執筆者に名をつらね、高度な内容の解説を執筆している。学芸員のように執筆する力をもった図書館職員が、今後増えることを望みたい。

山形大学での事例

次に、上記事例のように華やかではないが、私の所属する山形大学で実施した地域連携活動を紹介することとしたい。

●学内プロジェクトと連携したコレクションの提供

2007年度から開始した学内特別プロジェクト「藤沢周平の山形」と連動して、2008年4月に山形大学4キャンパス（山形市2か所、米沢市、鶴岡市）の図書館に藤沢周平ライブラリーを設置した。このライブラリーには、藤沢周平全集26巻のほかに、評論・評伝など藤沢周平に関する書籍を数多く取り揃え、学生のみならず一般市民も貸出を受けることができるようにしている。

特別プロジェクト「藤沢周平の山形」は、朗読会や公開講座などのほか、山形県内の高校生を対象とした「高校生朗読コンクール」や、一般市民を対象とした「エッセイコンテスト」を実施するなど、参加型のプロジェクトとなっている。藤沢

周平ライブラリーは、これらの参加型企画を資料的に援助するために用意したものである。

●地域コンソーシアムによる地域リポジトリ

近年の大学図書館では、大学の研究成果を収集・保存・公開する「機関リポジトリ」という試みが注目を集めている。山形大学では、この機関リポジトリを単独で実施するのではなく、山形県内の高等教育機関全体のリポジトリとして当初から企画した。

具体的には、地域コンソーシアムである「大学コンソーシアムやまがた」の加盟12機関の紀要を、電子化し公開する事業を進めている。これにより、独力では機関リポジトリを実施できない多くの機関の研究成果を、地域リポジトリという形で収集・公開できた。

また、図書館レベルでの連携活動から一歩ふみだし、大学コンソーシアムという大きな基盤の中に連携活動を位置付けたことにより、予算措置を確保できたことの意義も大きいと考えている。

●地域資料の収集・保存・公開

山形大学では2008年5月に、山形市内の寺院である宝光院から、最上義光ゆかりの絹本刺繍「文殊菩薩騎獅像」の寄贈を受けた。最上義光は、1600年（慶長五年）の関ヶ原出羽合戦で上杉家臣の直江兼続と戦い、その戦功により出羽五十七万石の所領をえた全国有数の戦国大名である。この文殊騎獅像は、義光の生母である永浦尼が1563年（永禄六年）に、初めて京都に上洛する義光の武運長久を祈って寄進したものであるといわれている。



藤沢周平ライブラリー



騎獅像の一般公開と研究者トーク

図書館では、この騎獅像の傷みが激しかったことから、学長からの特別経費により京都の専門工房で修復を行った。これにより同騎獅像は、山形の文化財としてよりよい状態で永らく保存することが可能となった。修復を記念した講演会・一般公開では、刺繍仏研究の第一人者を招き、天台宗系としては唯一のこの刺繍文殊菩薩像の意義を、一般市民向けにアピールすることができた。

●地域資料の電子化・公開

2008年3月から、図書館が所蔵する最上流の和算家・会田安明（1747～1817年）の著作をウェブで公開した。

山形生まれの会田安明は、江戸期最大の和算流派である関流（始祖：関孝和）に対抗して最上流を打ち立てた和算家であり、生前600巻を超える著作を著したことで知られる。また、同郷の最上徳内とも親交があり、和算のみならず海防問題や蝦夷問題などにも知見をもった当代一流の知識人であった。

ウェブ公開したのは、会田の孫弟子であった佐久間質・纘父子の蒐集書のうちの146点であり、会田の主著である『算法天生法』も含んでいる。近年忘れ去られがちであるが、山形が生んだ偉人の一人である会田安明を、再評価するきっかけになればと考えている。

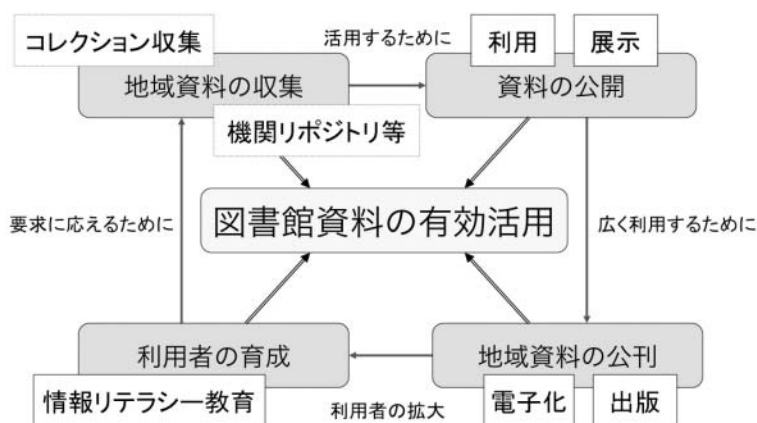
社会連携・地域連携の位置付けと意義付け ―

●図書館活動の中での位置付け

以上、近年の大学図書館の社会連携・地域連携の実例を取り上げてみた。さまざまなベクトルで社会連携・地域連携活動が展開しているようであるが、私なりにその全体像をまとめてみることにしたい。社会連携・地域連携とはいえ、何よりも図書館の活動であることから、図書館活動全体の中にそれぞれの連携活動を位置付けてみる必要がある。ここでは議論を明確にするため、地域連携に焦点をあてて説明しよう。（下図を参照）

- (1) 地域コレクション収集は、大学図書館としての資料収集活動の中に位置付けられる。機関リポジトリや情報リテラシー教育や展示企画が、大学図書館の中心的事柄のような風潮にあるが、地域コレクションの収集も重要な図書館活動である。特に地方大学は、大学の研究活動と連携して地域のコレクションを探索・収集する活動を、今後重要視すべきであろう。それが、五十年後百年後の貴重なコレクションを生むことになるのであるから。

また機関リポジトリは、この地域コレクションの収集と電子化に関わる活動ともいえる。



図書館活動の中での地域連携の位置付け

- (2) 収集した資料は活用されるべきものであり、資料の公開活動が必要となる。一般市民への図書館の公開・貸出などの利用サービスは、資料の公開という大枠の中に位置付けられる。展示会は、さらに積極的な資料の公開活動として意義がある。
- (3) 資料の公開よりも、さらに広く利用してもらうためには、資料の公刊活動が重要となる。所蔵資料の電子化は、この公刊活動の中に位置付けられる。先に紹介した展示会成果などの出版も、この公刊活動としての意味をもつ。
- (4) 資料の公刊により、さらに利用者の拡大が期待でき、多くの図書館利用者を生み出すことになる。本稿では取り上げなかったが、地域住民に対する情報リテラシー教育は、これらの利用者を育成する活動の中に位置付けられる。利用者を育成することで、さらに地域資料の需要・必要性が高まることになろう。

以上、4つの図書館活動に即して、地域連携の位置づけを行った。それぞれの地域連携活動は、共通して「図書館資料の有効活用を図る」という目的を指向するものであることを銘記しておきたい。

●社会連携・地域連携活動の意義付け

大学図書館の社会連携・地域連携の取り組みは、地方のマスコミなどに取り上げられ易い。積極的に情報を提供しマスコミに取り上げられることで、大学図書館の社会的認知度が高まるのが、

これらの活動の最大の効果であると考ええる。そして、この社会的認知度を高める活動は、大学における図書館の評価を高めることにもつながるのである。

山形大学でも、いくつかの地域連携活動がマスコミ等に取り上げられることで、大学当局の図書館に対する見方も少しずつ変わってきていると感じている。定常的な業務を確実にこなすことも重要であるが、社会的に注目される取り組みを心がけることで、社会や大学当局の図書館に対する評価を変えていくことができるのである。

よって社会連携・地域連携活動は、大学図書館のもつ社会的重要性を大学に対して示すとともに、新たな図書館活動の展開に必要な資源（予算・人員）を獲得するための戦略的前線活動と意義付けることができるのである。

関連文献

- (1) 米澤誠，広報としての図書館展示の意義と効果的な実践方法，情報の科学と技術，55(7)，2005，pp.305-309
- (2) 篠塚富士男，大学図書館における展示会活動，大学図書館研究，80，2007，pp.43-53
- (3) 木戸浦豊和ほか，展示会からはじまる大学図書館の新たな可能性，大学図書館研究，80，2007，pp.33-42

(よねざわ まこと・山形大学学術情報基盤センター・ユニット長)